

甲南大学 総合研究所所報

甲南大学総合研究所 〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 電話 (078) 435-2331(ダイヤルイン)

第34回 甲南大学総合研究所公開講演会

「文明の衝突か対話か」

—イスラームと向かい合う中国—

講演者 堀 直 氏

甲南大学文学部教授

安西敏三所長： 本日は第34回総合研究所公開講演会にご来聴くださり誠にありがとうございます。総合研究所では春秋二回、様々な分野の研究の第一人者をお招きして、広く一般の方々にも興味を持って頂ける話題について講演会を開催しております。今回は本学文学部教授、堀直先生をお招きして、昨年9月のハイジャック＝テロ以来、世界の中心的にして緊急の課題ともなっております、単なる政治・経済問題に留まらない文明の衝突をめぐる議論について、歴史的に、しかも通常のマスメディアでは報告されない中国におけるイスラーム問題を通してお話して頂くことになりました。今や唯一の「社会主義大国」となった中国における千数百万人のイスラーム教徒の動向は、国連安保理事国としての中国のイスラーム諸国への対応に影響を与えざるを得ないと思われれます。アメリカやイギリス、それにイスラエルなどの諸国のイスラームへの対応とは異なる中国の対応を主として中央アジアの歴史を通じてお話して下さることと存じます。

講師であられる堀先生は1946年に大分県でお生まれになり、大阪大学大学院文学研究科博士課程を修了され現在本学文学部で東洋史の教鞭をとっておられます。中央アジア史やシルクロードの歴史、さらには遊牧民史やイスラーム教史がご専門であります。朝日新聞社から『地域からの世界史6 内陸アジア史』を共著で出されておりますことからも分かりま



すように、この道では高く評価されている学究であります。本講演が少しでも皆様の国際政治の切実にして緊迫している問題に対する理解の一助となりますことを堀先生とともに願う次第であります。

堀直先生： ただいまご紹介に預かりました堀でございます。

専門は、中央アジアをやっております。イスラームというのは、大変広い広がりを持った文明であります。アラブ圏が純粋のイスラームになるはずなのですが、私はベルシャヤトルコのほうが専門であります。イスラームそのものについては、最近では情報が簡単にはいつてきています。それで私の専門に近いところのほうが、皆様方に高いレベルの情報を伝えられると思ひまして、中国とイスラームということで今日お話をさせていただきます。

<はじめに>

タイトルの説明ですが、『文明の衝突か対話か』は、のちにお話することにして、強調したいことはイスラームを9・11テロと結びつけるのは、オウム

真理教で日本文明を論じると等しい危険なことでありまして、本来は全く無関係な事象に過ぎないのであります。次に副題の方からお話させていただきます。イスラームと書きましたけれども、イエスをキリストと信じる教え、キリスト教ですね、ブツになるための教え、仏教と違いまして、イスラームというアラブ語には帰すべき教えと、「教え」がはいつているんです。ですからイスラームに教をつけると蛇足になるので、イスラームという言葉自体が宗教全体を示しているのだということをお断りしておきます。

また、日本とイスラームとの関係は実は疎遠でありまして、石油が主に中東地区から供給されるようになりましたこの50年以來に直接の関係がはじまったので、日本に入ってくるイスラーム関係の情報はまだ大変限られております。その多くが、ヨーロッパ経由あるいは、現在ではキリスト教文明の代表であるアメリカが、そう言うファクターを通してちょっと歪んだ形でしか入ってきません。

一つの例で申しますとコラソン＝アキノというフィリピンの大統領がおります。平和な革命でもって明るい政治を作ったオバチャン大統領と、日本ではいいイメージなのですが、ところが、イスラーム教徒側から、もうちょっとフィリピン国籍のイスラーム教徒から言わせると、マルコス大統領のほうが、まともだった。何もしない分まともだった。アキノ大統領はカソリック中心主義を振りかざして、南部のイスラーム地域の権利を侵害した反イスラームの独裁者であります。そのつけが、今、フィリピン南部でイスラーム教徒の武装闘争になっております。かように隣の隣の国の話でありますけれども、フィリピンもイスラームがらみでは情報は入ってこないであります。

<中国とイスラーム>

そういう状況の日本であえてイスラームを論じる場合、一つ、媒体として、中国がいいのではないかと思います。それがイスラームと中国とを並べた理由ですが、皆様方に日本語でお話しているこの時、日本語で異文化を話すことは実は、日本を話していることになるのです。つまり、日本と距離を測りながら、日本との違いを意識しながら、話していることとなります。この点中国というのは、日本を考えるのによい素材の一つであって、しかも世界を取仕切っているアメリカ文明と唯一、対立とはいかない

が異議申立てのできる一つの大国であります。日本は中国とは2000年以來の付き合いのある文明であり、それを素材にイスラームを語る事で世界中でいわれるキリスト教とイスラーム文明との対立を解く、あるいは理解するヒントが得られるのではないかと考えました。

でも何故アメリカと中国が並べられるのか。そこで文化と文明の使い分けですが、歴史の方では装置あるいは仕組みであって、言語やしきたりが違っても真似すれば同一化できるもの、受け継がれるものを文明といい、文化は言語を中心としまして、他に真似ることのできない内容をもったマナーをいいます。中国文明は量と質を兼ね備えた、しかも伝統的な長い歴史を持った文明であり、地大物博といい、昔からサイズがでかかったので、一応なんでも、どんなケースでもあり得る文明、しかも動かないという最大の特色が中国文明であります。そして、その基本は漢文化であり、黄河流域から起こりまして、もちろんウェイトのかけ方は、チラホラ動くことがあります、いまだに5000年前の遺跡の上に現に人々が、住み続けているというそういう意味で不動の文明であります。

それは、漢字という装置、漢字は中国文明のエッセンスなんですけど、これはまねができるので朝鮮文化やベトナム文化や日本文化へと伝わります。中国文明はその漢字を一貫して持ちつづけている。それから、人口が常に世界で1番、多くの人口をかかえたシステムであった。そういう意味からも古くからのチャンピオンでありました。

それに対して、アメリカの文明は伝統がありません。国家で申しますと200年の歴史しかございません。移民が始まったことから考えても今のアメリカ文明を支えている中心になっている人達には300年しか歴史がないのです。移民文明というのは、無人の地にしてしまったあと、要するに先住民を皆殺しにするとか、どこか隅っこに追いやるか、何も無いところから自分たちで設計して作り上げる文明で、アメリカの移民は、全部他の文化圏から来た人々です。他の大陸や海を渡って、ヨーロッパやアフリカやアジアから渡ってきた人達が前に何も無い、実はあったのですが、ネイティブ＝アメリカンかつてはインディアンと呼ばれていた人々が住んでいたのですが、その人達はいなかったことにして作られた文明、つまり歴史が無く、動きっぱなしの文明といえます。あとでそのことは説明しますが、それがアメリカ文

明なのです。それが多くの世界の国々や文明とは別のものなのですが、現在の人類の文明の代表と見られているのは現実です。

つぎに中国の文明をどのように説明するかということから話していきます。中国に匹敵する文明をヨーロッパ系に求めるとローマ帝国というのがあります。紀元前一世紀ごろから紀元後の300-400年ぐらいに存続していた、地中海文明とでも言える存在でした。同じ頃中国、東アジアに存在しておりました「秦」、および「漢」と足し合わせると四百数十年の歴史を持っており、ほぼ重なっております。この2つのユーラシアの東側と西側の帝国、文明は似通っています。多民族的であり、日本のような小さな文化とは違い、世界性を持っていた文明でした。ところが、そのうちヨーロッパでは地中海的世界は崩壊し、中国も同じ頃に崩壊しますが、全く同じ場所に同じサイズで隋と唐という国際文明が存続します。もう一方、かつてのローマ帝国の領域の土地や人々は大部分がイスラーム新文明に吸収されます。7世紀以降地中海文明はイスラーム圏の人達、ウマイヤ朝・アッバース朝というイスラーム＝カリフに率いられれた文明に吸収されます。軸が移って言語的にも宗教的にも違う文明に移行するわけです。

のちに現代のアメリカ文明が世界の人類史の先頭を走っているという文明のストーリー、いわゆる歴史的筋立てが作られます。つまりローマ帝国の偉大さは、やがてゲルマン系、フランス王国、西ヨーロッパに中心をずらして継承された。そのゲルマンの中でアングロ＝サクソンと呼ばれたイングランド系の人たちに担われ、イギリスの方に渡ってしまう。そして、そこでプロテスタントティズム、宗教改革を経たプロテスタント（新教徒）たちによって作られたアメリカ大陸に遷移する。そういうふうに転々と中心が、担い手が移って行って継承されたのが現在の人類のもっとも指導力のあるアメリカ文明と説明するわけです。これをWASP史観と呼んでおります。ホワイト・アングロサクソン・プロテスタントの頭文字をとってWASPと読んでいます。これは、面白い理屈で、歴史というものは偽造性というか都合のよいところだけをつまみ食いするという大きなトリックがあります。しゃべっている言葉が違う。文化が違う人達それに住んでいる地域が違う人達、古代オリエント、ギリシャ、ローマ、セーヌ川、ロンドン、アメリカ東海岸と移って行って常に先頭を走っているストーリーとなります。

ただ現在の国家の多くは、ヨーロッパで作り上げられた国民国家という考え方、文化のエッセンスは、言語なんですけど、その言語を共通にする人たちが一つの集団を作って国家をつくるのが、一番安定的であるという理念に基づいています。たしかに、19世紀のヨーロッパのサイズでは間違っていない点があります。しかし、その結果として、ヨーロッパは面積的には中国大陆とほぼ同じですが、中国サイズの地域が30余の国に分かれています。それで行き詰まり、今ヨーロッパではEUとか再統合に向かってるのはご存知のとおりです。

そういう歴史とは全く違うものが先程から言っている中国文明であります。つまり、一箇所から動かずになおかつ一つであり続けるという方向性がユニークであります。だからこそ後でお話するように、アメリカに「ちょっと待て！」と強くといえる根源があるのです。もう一つアメリカに対して異議ありと申せる理由の一つに中国、中華人民共和国が実態とはかけ離れているとはいえ、社会主義を名乗っております。中国文明は、漢字でもってずっと続いていた文明が、20世紀になって1949年中華人民共和国を成立したときに選んだ社会のシステム、これには当然歴史性があり、当時中国大陆が1つにまとまろうとしたとき片方では政権抗争を続けていた中国国民党、これはアメリカの後押しを受けておりました。それに対して陸伝いもあってサポートしてくれたソ連型のシステムをとった共産党が統一したということで社会主義が動かせない国是になっていきます。社会主義とは封建制や資本主義の後に来る素晴らしい人間のパラダイスに近づく一つのシステムだという架空のプランに基づいたのでありますが、今のところ放棄していないのです。これも資本主義のチャンピオンのアメリカに対抗する意識の根源の一つです。

さて、日本文明・文化というのは、同じ所を動かない、担い手が大きく変わっていない点では伝統的であり、移動のない文化だし、中国文明と共通する部分があります。ただ日本と中国は、ごく近代になりまして、近代国家・国民国家としてできたかどうかで大きな差ができます。もう一つ中国の場合は大陸型文明でありますのでシナ族とは別の価値観を持った人達を常に抱え込みながら膨らんだり変容したりします。こういったケースは日本には非常に少ないといえます。近百年前に日本の周辺で、はっきり異文化として意識していた人々はウタリ（アイヌ）の

人達と沖縄（ウチナンチュウ）の人々だけであろうと思います。ところが、陸伝いに広がりますとそういう人達がたくさんいるわけです。そういう周辺部を含みつつ、帝国として存在していたのが中国文明なわけで、長く続いた点、長く同じ所にいた点ではアメリカよりずっと中国の歴史経験に日本は近いのです。

ここではじめて中国とイスラームがどう結びつくのかと申せば、二つの側面があります。一つは中国の国内には意外とイスラーム教徒がたくさんいるということです。イスラームは610年頃にムハンマドという名のアラビアのメッカの商人がはじめたものです。アラビア半島から東西南北に広がり、やがてシルクロードの陸伝いに現在の中国の領域内にも深く入っていきます。中国の内陸部までイスラーム教徒が入っているのです。つまり、中華人民共和国はアラビア半島中心で広がってきたイスラーム教の東の端を形成しているのです。

もう一つは、中華人民共和国が独立つまり成立した20世紀に世界では数多くの独立国が成立します。20世紀のはじめに世界の独立国というのは、中南米をのぞけば20ほどしかありませんでした。ところが、現在国連加盟国で200弱、オリンピックでは200を超える地域が出ています。20世紀とは国家の数が10倍になった時代であります。そういう状態になって、社会主義中国が、1949年にデビューするわけですが、新しく独立なり成立した国々の中に数多くのイスラーム国家が数多く含まれています。「イスラーム諸国会議」というイスラーム教徒の多い国々の親睦会のようなあまり決定権のない会議がありますが、加盟国は55カ国あります。つまり、イスラームが影響力をもつ多数派の独立国が55カ国あるということです。新中国はその国々と外交をやります。そこには中国を主に支えた漢文明、これとの価値観、それと社会主義を目指す共産党の価値観そういうものが一緒になった方策がとられます。つまりイスラームと中国を論じる場合中国領内のイスラーム教徒の件と、イスラーム諸国との中国の対応の、二つの面を考える必要があるわけです。

<中国ムスリムの2系統>

次に2番目の話題に参りますが、中国の中にいる中国国籍のイスラーム教徒には大きく二つに分けられます。中華人民共和国は多民族国家なので、国内の民族政策というものを持っておりま

す。中国人と呼ばれる漢字を使い漢語をしゃべる漢族が、97%を占めています。しかし、もともと総人口が13億近い国で、残り3%の人達だけでも4000万人近い、フランス国民と同じ数位の人達を少数民族と呼んでおります。主流派、大コアをなす97%の漢民族とそのほかの55カ国の少数民族からなる国が現在の中華人民共和国であります。こういう自己規定をしておきまして、少数の民族には優遇的な政策、例えば大学入試とか、配給とか議員とかというポストには少数民族枠というものがありまして、優先的にそういうところに配分する。あるいは有名になりましたが、「一人っ子政策」というのを漢族の都市住民を中心に夫婦で一人しか子供を作ったらいけないという制度も、少数民族は対象外にする。少数民族は無制限ではないが2、3人までは認めるという政策をとっています。

中国は陸伝いで拡大したり縮小したりを繰り返した歴史を持っています。その間に徳治主義という、文化的徳治、国境のない帝国の国家の理念が成立します。この徳治、武力を使うのではなく、漢字を使う文明装置、それでもって周りに緩やかなレベルの違う文化層を従えている、これが伝統的な中華帝国なのです。ですから、国境などはありません。漢字を知ればどこでも中国人になれるという思想です。真ん中にコアがあって、周辺に漢字にいづれなびくであろう人達を配置する構造、これがなごりとして残っているとおもいます。

また少数民族という政策をとるのは旧ソ連も中国も一緒でしたが、ロシアには徳治主義という伝統はありません。もともとモスクワというのは、チンギスカンの孫が任じた代官が造った遊牧的な国で、徳治的な世界のセンターという伝統的な意識はありません。ソ連型の少数民族はロシア人と同等に扱うという理念で作ったのですが、ソ連邦を結成したときに周辺の民族の独立権を認め、実際共産党に、がたが来てゴルバチョフさんが後退したら、皆出ていってしまった。ソ連が解体してしまいました。あれは、ソ連を造った時の約束でイヤになったら離れてしまうという規定の基に解体したわけです。それに対して、近代の植民地にされたという苦い歴史を持つ中国では、真ん中に中心があって、その周りに散らばっている人達の独立は認めないという分離権は否定した形になっています。そこが違います。

順番を間違えましたが、漢族を中心にまわりにいづれは漢族文明に徳化するであろうという少数民族

がいて、中華人民共和国の中でイスラーム系の人達は全部で10の民族があります。これら大きく2つに分けられるのですが、1つがトルコ系といわれる人達、トルコ系の言葉話すイスラームの人達です。普通トルコといえば、アンカラの首都として、イスタンブールを副首都とするアジアとヨーロッパをまたがったトルコ共和国ですが、実はあのトルコの人達は、言語学的なトルコ系の分類からいうと、1番西の端まで行った人達なのです。本拠地は、バイカル湖、東シベリアのバイカル湖の周辺で、その辺に残っているヤクートあるいはサハと呼ばれている人達がトルコの1番古い形の人たちです。その中でだんだん西の方、南の方に移り、そして中央アジア、西アジア、いちばんはじめにバルカン半島まで行った人達がトルコ人です。

ですから、シベリアのバイカル湖の辺りからヤクート、トバ、キルギス、ウイグル、カザフ、ウズベク、アゼルバイジャンと、ずっとトルコ系の民族が並んでいます。その中の人たちの多くが、11世紀以降西から経てきたイスラームに改宗します。言語的には、トルコ系の言葉話し、文明的にはイスラームを受け入れた人たちが中央アジアの真ん中にベルト状に分布しているのです。後の時代、中国の清という王朝ですが、それが大きくなった時これらの一部が帝国に組み込まれます。清の王朝といえますのは、16世紀末、秀吉の朝鮮侵略のドサクサに力を蓄えてきたマンジュ族、モンゴル族が連合して当時の弱っていた明という王朝を倒して成立しました。マンジュ族、モンゴル族、漢族が一緒になって清という王朝を創り、皇帝はマンジュ族から出しております。ですから、北京故宮の額をご覧になればわかりますが、～門、～殿とかと書かれています。あれは天安門ができた頃の事情を反映しており、マンジュ語、漢語、モンゴル語の3つで書かれています。18世紀になって、ある事件をきっかけにチベットのほうにも清朝の影響がおよび、次に回部つまりイスラーム教徒が住んでいる西部、ここも清朝に占領されます。つまり、18世紀中ごろ、1750年代清朝が領土的に1番大きく、皇帝権が強くなったときには、5つの民族、マンジュ族の皇帝を中心にモンゴル族、漢族、チベット、イスラーム教徒とこの5つが一緒になった王朝だったのです。トルコ系イスラーム教徒の住んでいる所は現在新疆ウイグル自治と呼ばれていますが、「新疆」とは新しい領土という意味です。時の乾隆帝がその名前をつけたのですが、このとき、

清朝の中に入っていきます。ただし、20世紀のはじめに辛亥革命が起こります。

やがて、お話していきますが、孫文という人物が中心に進めるわけですが、孫文は、初期には、「滅満興漢」つまり、中国がこんなにだめになったには、中国が漢族じゃなくて、マンジュ人の皇帝を下に古い体質で制度が作っているから、ヨーロッパや日本にやられるのだ。満族を滅ぼして、漢族の国を復興させようというスローガンで清政府に対する反対運動を始めます。ところが、革命の進展のなかではたと気づくのです。かつての漢族だけのテリトリーでありますと、実は、現在の中国の3分の1もないのです。その他の4つの民族およびその文化が持っている地域は、漢族だけの国になってしまったら離れていってしまう。そこで辛亥革命の途中から五族共和を掲げます。5つの民族が1つになって新しい共和国、中華民国を作ろうと呼びかけるのです。ただし、そのときモンゴル、チベットはいったん独立してしまいます。それは、チベットの後ろにはインドを植民地にしていたイギリスがついていましたし、モンゴルの一部にはロシアが付いていたからです。

ところが、イスラーム教徒の多い、一番西の部分は独立に必要な民族的意識や中国から離脱する経済的仕組み、そういうものが欠けておりましたので辛亥革命のときも中華民国にとどまります。中華人民共和国ができたときも背後から、ソ連の後押しがありまして、ソ連と引っ付いておった共産党の中華人民共和国にとどまったわけです。決して、主体的選択とはいいたいのですが、清朝のときからずると中華民国、中華人民共和国の領内にとどまり続けてます。これで、中国領内にトルコ系のイスラーム教徒が残ったわけです。

日本人にはなかなかご理解いただけないのですが、ふつう、成熟した社会であっても民族や国というシステムを持たないでやっていた人々もたくさんあるのです。20世紀になって、民族国家というものを作らなければ不利だという風潮になったときに、中央アジア現地の人たちは自分達の民族に名前がないのに気がつきます。先に民族名をつけ始めたのは、ロシア革命の後のソ連領内の人々です。ソ連にいたトルコ系の人たちは、ウズベク、カザフ、キルギスという名を得ます。それと血縁関係を持つ中国領の人たちは同じ民族名を名乗ります。ところが、新疆のオアシスに定住したイスラーム教徒のトルコ人たちには全部ひっくるめる名前がありませんでした。

名前がなければ民族主義とか、民族運動などそもそも存在しないので、それで彼ら自身の間から自分達の名前を作る動きが起こります。そして、9世紀にトルコ系遊牧民で現在のモンゴリアに巨大な大帝国を打ち立てたウイグル帝国に注目します。その一部が新疆にも移住するので血縁的には何らかのつながりはあり、まるっきり偽物とはいませんが、ほとんど縁がなかったのですが、ウイグルという遠いご先祖の名を自分達の民族の名前にします。そこで、初めてウイグルという名前が使われ始めるのです。1920年代のことです。そのウイグルの人たちはトルコ系でありますから、バイカル湖からバルカン半島まで広がるトルコ人の一部だという意識があります。イスラーム教徒と意識すると、メッカを中心として、北アフリカ・中央アフリカからユーラシアの真ん中、インドネシアまで広がるイスラーム教圏の一員だと思っています。しかし、政治的・歴史的偶然もあって、今、中華人民共和国の中に入っている。彼らは、複雑な立場に立たされているのです。

もう一つ中国領内で見逃せないイスラーム教徒のグループが回族です。回族を英語で呼ぶとチャイニーズ＝ムスリムあるいはムスリム＝チャイニーズとなります。形質いわゆる骨格、皮膚の色はモンゴロイド、漢族と全く異ならない。言語も漢語を使うことでも変わらない。風俗、家のづくり、住まいのづくり、着物も基本的に変わらない。ただ、信仰はイスラーム、端的に言うと豚が食べられないチャイニーズですが、厳格な一神教徒です。つまり、アラー（神）ではない皇帝は礼拝の対象にしてはいけないと信ずる人々です。漢文化では、神に相当する語は「天」で、天の命令、天命を受けたのが天子、皇帝であります。当然そこに天子、皇帝に基づく秩序に従う人は天の代理人として、皇帝として崇めなければならぬ。ところが、イスラーム教徒としては、アラー以外の存在を拝むということになり、一番基本的な宗教原理からの逸脱なわけです。そういう人たちが回族です。

で、こういう人たちは、どうしてできたのかといえますと、これもまた、長い中国の歴史の結果なのです。まず、唐、宋の時代、つまり中国の漢民族がまだ対外的に盛んに往来していたとき、この時やってきたアラブ商人、イラン商人、そういう人たちの子孫が中国に住み着きます。唐は10世紀の初め滅びたので千年以上経っているんですね。習慣や形質の漢族化・シナ化が進んでいます。

二番目の波として、13、14世紀にやはり、イスラーム教徒がどっと東アジアにやってきます。ジンギスカン、その子孫達が創りあげたモンゴル帝国の時代です。東アジアだけを見ますと、「元」という王朝に見えますが、あれは、大モンゴル帝国の中国の統治のため出先機関、本当は、ずっと奥のほうに広がっているのです。先程申しましたモスクワなどは西の出店の一つなんです。モスクワから地中海、東ヨーロッパから地中海、それから北インドからチベット、中国内、これら全部含めた大モンゴル帝国という国家が成立していました。当然統一した国家内の往来がさかんになりますから、大量の人々が移動しました。また、その頃十字軍のおかげで西アジアの銀が不足していました。人口が多くてなんでもありで豊かな中国領の銀を求めて、大量にイスラーム教徒が、モンゴル帝国の中を西から東に移動するのです。モンゴル帝国はやりすぎな側面があって、王朝は100年という短命で終わってしまいますが、その間に100万単位で西からイスラーム教徒がやってきていました。その人たちが中国領に取り残されたのです。モンゴル人を、追いはらった漢族は、「明」という王朝を樹てます。明帝国の中では、かつてモンゴルに支配されたという裏返しとして、モンゴル帝国の中で漢族より優遇されていたイスラーム教徒に対する迫害が強まり、そういう人たちが明の辺境に逃げ出します。たどりついたのが、現在の回族の分布図です。南で言うとベトナム、ビルマの境、ラオスの境にあたる雲南省、それから四川省・甘肅省、かつての「明」の辺境地帯です。そういうところにモンゴル時代のイスラーム教徒の末裔たち、西アジアから来た人たちが押し込められました。モンゴル時代からでも700年は経っていますが、以前の例と同じようにその間に漢族との同化が進んで形質的言語的に漢化してしまったチャイニーズになります。しかし、イスラームという信仰は捨てませんでした。こういう人たちも回族の一部なんです。

もう一つ最後に18世紀にイスラーム新教という新しい教団運動が起こります。同じ回族の中で新しいイスラーム教団ができます。これは元気がよく、盛んな宗教活動をやり信者を増しました。つまり三つの波の結果、回族が800万も残っているということになるのです。残っているという言い方は失礼なんです。現在これをヨーロッパに持ってくると中規模クラス、スウェーデンぐらいの人口の規模になり

ます。この人たちと、トルコ人・ウイグル人かは顔つきが違うので見ればすぐわかる。ところが、言語は、全く違わないのにこの人たちがどうして漢族と違う民族として認められたかと申しますと、これにも、一つの歴史性があります。

中国共産党と国民党は、先程話しましたとおり、1940年代まで政権をめぐって内戦状態にありました。その中で、この回族を巡って意見が違いました。国民党は回族を民族として認めませんでした。国民党総統蒋介石の奥さん宋美齡はクリスチャンでしたが彼は、「自分の妻はキリスト教徒だけどキリスト族とは呼ばない。漢族で宗教が違うだけだから。孫文先生も洗礼を受けている。けれども漢族である」と申しております。つまり、国民党は言語・形質上で漢族と回族との分類ができない。回族というのは民族的に漢族であって、信仰がキリスト教、儒教、道教と違うようにイスラームを信じているだけなんだということで民族として認められないという立場でした。

共産党も中で揺れ動くのですが、40年代には回族を少数民族、漢族とは違う民族だと認めます。30年の延安時代から40年代、中国でいつ、どこで、だれが始めたということは研究はついていませんがアバウトに1940年代中国共産党の文献からは、回族を少数民族として認めるようになります。これは私の仮説なのですが、1934～36年当時、中国共産党の本拠地のあったのが台湾の向かいに会った福建省と江西省の間の瑞金という処でした。ここからいろんな理由がありまして、共産軍が大移動をします。瑞金から雲南省を通り、四川省の西チベットの境を過ぎ甘肅省を通って、黄河のポコッと出た所の真ん中の延安まで移動します。これを「長征」と呼んでいます。この間に共産党の幹部が歩いて通った所が全部、回族地区なんです。この間に彼らは、海側で中国を見ていた国民党とは、違う認識を持ったと思います。つまり、格好が全く同じでもアイティンディティーが全然ちがう。漢文明の皇帝・「天」というよりは、アラーというものを信じ、そちらの方の道理で動く人たちを同じ民族として扱うのは無理だと気づいたのではないのでしょうか。当時の内戦で回族をどちらに付けるか大きな問題です。延安は回族が多数住んでいる地区の近くにあります。民族というのはだいたいトルコ族の処で申したように、現在は、広がって住んでいても元は一ヶ所に住んで広がるのが普通であります。けれども回族はもともと一ヶ所に住ん

でいた形跡がありません。その回族を一つの民族として認めたのは中国共産党の認識が現実的であり、かつ、判断は正しかったと思います。なまじ同族として差別的扱いをするよりは、はっきりと違うのだという形に分けたほうが摩擦を少なくする点では賢明であったと言えます。

ただし、改めて強調しておけば回族は漢文明的ではないということです。漢字を大事にするという点では回族も同じですが、皇帝・天という思想でもなく、儒教でも道教でもないそういう価値観を持つ人々であります。現在の中国政権は無神論の立場に立つ共産党の社会主義政権であります。宗教を重視する人たち、中国籍のイスラーム教徒はカザフ、ウイグル、キルギスなどのトルコ系の1000万、回族の800万の計1800万ほどがいます。もしかすると、中国国内の不安定要素にもなりかねません。反権力・反無神教という方向や、漢族の国家からの離脱の思考もあります。現に西北ムスリムの大反乱が1860年代に起こっております。20年ほど続く大反乱ですが、これは、回族と現在のウイグル族たち、中国籍のイスラーム教徒が連帯して起した反乱です。清朝や漢族を追い出すまではトルコ系と回族は共同ですが、追い出した後で一緒にできないということで、20年ほどで結局「清」に鎮圧されてしまいます。それから、後の文化大革命とか時折、政府の施政のミスに当たってはこういうイスラーム系の人たちが一番最初に運動を起こす傾向があります。これが、不安定要素として問題をはらんでいると私は思っています。

<中国とイスラーム諸国>

次に中国とイスラームの関係で2番目の側面、共和国と戦後続々と独立して行ったイスラーム諸国との関係はどうかといいますと、これは大陸国家の問題、大陸国家の宿命がまずあります。その外、ジレンマ・トリレンマといいますが、中国とイスラーム諸国の関係では日本が経験しなかった問題や矛盾を指摘せざるを得ません。1つは、善隣外交という問題。日本は八方美人的にやっていて国民的には受けがいいし、痛みを伴っていません。というのは、異民族と接して住んだことがないからです。韓国が隣国だ、台湾が隣国だ、フィリピンが隣国だ、ましてや、ロシアと隣り合わせの国だという意識がほとんどないでしょう。陸伝いの人々の問題で、隣と仲良くしたいと思っても、実際に国境で接しているといろいろ

と問題が起こります。接してなくても北方問題、竹島問題、尖閣列島と言う問題があったらきれいごとではすまない事実を思い出してください。インドと中国は隣り合わせですが直行の定期便がありませんでした。正確に言うと今年の4月から初めて運行し始めたのです。いかに難しいか、ご理解いただけるでしょう。また、国境を接しているパキスタンとインドの対立も考慮しなければなりません。また民族が先程申したように後の時代に人工的に作られた側面が多いので、跨境民族つまり、国境を越えて分布する民族もたくさんでできます。たとえばカザフ族はモンゴル・中国・ロシア・カザスタンの4つの国境にまたがって住んでいます。その1つを見ても中国的でもない漢文明でもない人々が別々に周辺にいる。それと外交を持つ国と国との対等の立場でやり取りをしなければならぬ。中国には大変な気苦労があると思います。

それからもう1つは中国は社会主義国であり、社会主義とは人民が主役であり、一握りの身分とか血統とかにより特権的な階級は、否定の対象でありました。ところが、アジア、アフリカのイスラーム諸国の多くは君主制を取っています。その国々と人民が主人公でありと称する社会主義国中国とは対等に関係を結べないのが原則でした。君主ではなく人民と連帯するというので反政府ゲリラを支援して、いろいろな問題が起こったことは皆さんご存知だと思います。君主制を打倒しなければならないこと、その君主国家とも実際は付き合わなければならないというジレンマですね。もう1つは、先程紹介しましたウイングルの人々のように、私達は何なんだと考えれば、パスポートの国籍は中華人民共和国であるが、使っている言語はトルコ系で、それに近い人種意識を持っている。それから、イスラーム教徒の立場から考えるとアラブ人やベルシャ人やパキスタン人と同じ文明圏の一員という人々も居るわけです。これらの人々やこれらの国々とも対応していかなければならない事情があります。

また更に社会主義の主導権争いもありました。アメリカやイギリスの帝国主義と対立して世界革命を目指す建国初期の中国は、ソ連が兄貴分としておりました。ところが毛沢東の個性と独特の中国共産主義の体質で中ソ論争が起こって、中ソ対決関係になり、その時に社会主義の盟主めざして、中国の外交に一段と複雑な因子が入ってくるのです。一つの例として、イエメンという国があります。私は96年に

甲南大学の研修でイエメンに行ったことがあります。イエメンは、斧のような格好でインド洋に突き出ているアラビア半島の南の東岸の一角にあります。そのイエメンの首都サアナの町の郊外の砂漠の中に土饅頭が100ほど並んでいました。それは、イエメンの道作りを助けに来た中国人の犠牲者の墓だということです。何故イエメンまで中国人が着ていたのかといえば、60~70年代当時のイエメンは、二つに分かれておりました。南のアデンを中心とした「南イエメン」はソ連の後押しを受けた社会主義国でした。もう一方の「北イエメン」はサアナを都とする部族連合国家でした。中国はソ連の後押しを受けていた南イエメンの対抗上、北イエメンのサアナの道路作りの手伝いに行っていたわけです。ところが、社会主義南イエメンは、北イエメンに、戦争で敗れてしまいイエメンは統一されます。ソ連憎さのあまりに展開していた北イエメン政策は社会主義の大儀の上では無に帰すわけです。オサマ=ビンラディンの出身が北イエメンであることからわかるように、後に残るのは道路作りで犠牲になった中国人の墓だけで、イエメンの人からは感謝されるわけもないのです。

ソ連が崩壊し、かつ同時進行でこの前亡くなった鄧小平氏の改革開放という路線が始まりますと毛沢東的な原則外交がなくなります。そうなると、随分リーズナブルといえますか解りやすいものになります。1つは、革命の輸出政策、かつてはいろいろな所へ、ラテン・アメリカ解放のため中南米のゲリラ組織に援助をしたり、カンボジアのポルポト政権や東南アジア、イスラーム反政府ゲリラなどの反政府的な支援はやらなくなります。現政権を一応承認する形で君主国とも友好的でありえることが前提になります。2番目にソ連が崩壊した後アメリカが唯一の超大国になりました。現在の中国の外交スタンスはナンバーワンでなくてよいという立場にあります。かつて毛沢東の時代のように10年間でイギリスを追い越して、世界の先頭に出るなどとは言いません。しかし、いうべきことは言うと、というスタンスをとっています。ある程度を言わないと伝統のある歴史性ある漢文明の正統政権と国内的・文化的にみなされないからです。アメリカの移民が先住民を皆殺しして出来上がった文明と共存の上の共存で積み上げてきた自分達の文明とは違うという、はっきりしたプライドに基いているのです。

超大国アメリカにはかなわない。あれを追い越す

ことは無理かな？しかし、言うべきことは言うスタンスは大変日本人には理解しやすい立場だと思えます。“2番目でいいよ”しかし、中華文明の継承者、非ヨーロッパ文明としての担い手としてのプライドなのでしょう。1995年に私は中国で「18世紀学会」という面白い学会に出席しました。なぜ18世紀かというと、この世紀が中国学者達の考えるターニングポイントなのです。すなわち18世紀前半までは中国が世界のトップだった。社会生産、国富、生産性等々。ところが、18世紀後半の西欧は、産業革命に成功し、そして国民国家という国民総動員ができるようなシステムがうまくいった。けれども中国の方は君主制国家体制の元で活力がなくなって、やがて19世紀にその場が逆転したと考えるのです。反省の原点が18世紀にあるわけです。その時に極めて強調しているのがアメリカ！アメリカ！って威張っているけど18世紀では中国よりずと下だ。何よりも許せないのはあの国はインディアンの皆殺しからできたからだ。我国にも問題がないわけではないが、ウイグル族やモンゴル族を皆殺しにしていないという風に主張するのです。一面、正論です。たしかに何もなくて同じクリスチャンの移民同士の歴史作りや国づくりは土着形の場合よりずっと楽だと思います。日本的にも中国のこの見解に共感できる所が多いです。

もう一つ現政権の正当性も言わないといけないところがある。現在の共産党独裁のもと、国民生活の向上、これが政権党の任務と意識されています。ぐちゃぐちゃいうより豊かな生活を保障することが、共産党が正統政権である証明だと考えておりますので、国民生活の向上を、外交の主軸のひとつにしております。これを端的に言うとエネルギー資源の確保ということです。1993年には中国は石油の輸入国になってしまいました。爆発する国内需要で国内では、石油が賄いきれなくなったのです。80年代までは消費が少なかったのがどうもなくなったのが、93年をポイントにしまして、輸入国になってしまった。そうしますと、日本と同じで見境なく石油が取れる所と付き合うことになってしまった。そういう意味でイデオロギー偏重の外交政策を変えざるを得ない、つまり、石油がほしいという外交は日本にそっくりになってきました。ただ違うことは、国内の石油資源というのを新疆、尖閣列島などの辺境部にも求めている点です。国内の民族問題や国際関係の上で極めて危険な要素になっていると思えます。

<衝突か対話か>

「文明の衝突か対話か」という本日のタイトルは、主催者である安西所長から「こういうタイトル」というお題頂戴的などころがありました。「文明の衝突」というのはハーバード大学の政治学者サメール・ハンチントン氏の本のタイトル名です。彼の頭には、土着的な動かない文明とかそういう歴史的経緯によって動くところが全くありません。中国を儒教文明として、一つの柱として、イスラーム文明と対ヨーロッパのキリスト教文明との対抗のためこの2つが組むかもしれないとか、歴史上あり得なかったかなり無茶な論理が目立ちます。ハンチントン氏は日本文明は儒教文明に含めずに日本文明という別の文明と掲げていますが、儒教文明と日本文明はどうなのかということは詳しく書いてはおりません。はっきり申し上げて、黄過論、黄色人種あるいは非ヨーロッパに対する諸文明の牽制みたいな感じがして、どこか感じのよくない本です。ヨーロッパ人的にはわかりやすく理屈が見つかるかもしれないが、しかし、物事を歴史的に見る人間にはイスラーム文明をヨーロッパ文明との対比という単純化も疑問です。そしてその文明が儒教文明と結びついてドンパチするというのも単純すぎると思います。もう一つは「衝突」というとすぐ武力衝突とか、武力行使の構図に陥りやすいパワーポリテックな議論に過ぎる面があります。しかし、意見の対立という軽い意味での衝突もあるわけで、対決以前の摩擦レベルでの共存のほうが歴史的だと思います。衝突は衝突として認め、そして、対話、共存への対話そういう方策というものがイスラームおよび中国そして日本という三題話でできないかと思ったのが2ヶ月前このタイトルを届け出たときの気持ちであります。

その「衝突と対話」ということで話しますと、日本と中東を中心としたイスラーム諸国はお付き合いがなかった分だけ、直接の利害関係および近代国家になるまでの接触がなかった分だけ、日本にとってはありがたい、良い環境にあります。中国は輸入国だといっても自分のところに使う7割ぐらいを自給できるのですが、日本の石油資源は100%そして、その大部分をイスラーム圏からの輸入に頼っています。全部売っていただく、そこで加工した製品を買っていただくという経済のみの対話の関係です。過去には、中国や韓国とはいろいろな経緯があって、素直には受け取ってくれないものがありますが、この中東イスラーム圏に関しては石油を買ってくれる良

いお客さんであり、自動車や電気製品を作って売ってくれる文明国、経済的対話のみで政治的にも軍事的にもプレゼンスが一切なかった分、評判の良い、いいとこ取りの側面があります。ほめすぎかもしれませんが、日本の外交の成功例の一つです。

次に、イスラーム諸国の人たちを見ると、君主制を採りながら、民主制議會主義を守り、それから、伝統文明、日本語を保持したまま高度産業国家になったという高い評価があります。アジアやアフリカで大学教育を大学院まで自国語でやっているのは日本と中国だけではないでしょうか。自分達の言語では高等教育は不可能なので、英語やフランス語でやってしまうからです。つまり、日本語の伝統文明を守りながら、近代化に成功し、60年前には世界52カ国を相手にドンパチした力があつた。そのときの相手には入っていなかった、自分達の所には影響がなかったということでイスラーム圏の人たちにとっては良いイメージあるわけです。戦後は、平和主義を唱え、自分達のプレゼンスを軍事力や武力で示したことがない。しかも、イスラーム圏の人たちにイメージが良いのは日本は武器輸出を一切行っていない。アラブの人たちは日本はテレビや車など作る力は一流だから武器など作ったらさぞかし立派なものができ、よく売れるのと言いますが、一切売っていないのはご承知の通りです。たしかに戦後世界に誇れる外交の一つの軸であり、評価される処でしょう。

またイラン、イラクに対するアメリカのように一方的に片方を押さえつけて、片方に肩入れしたり、その逆を繰り返すようないきあたりばったりにはやっておらず、日本はイランにもイラクにも平等な外交を基本としています。実は1年前の去年の5月にアフガニスタンの北部同盟派と亡命派とタリバン派が個別に東京で集まって会議をやっていました。日本政府は「お金」しか出せない所が悔しい処ですが、アフガン復興支援金を提案して、共同統治に移行したらどうかという対話をやっていた。ところが9.11事件以降のような結果になってしまい、武力のない国としては短期的には挫折を味わいました。

ただ気になるのは、日本はイスラーム教徒とはあまり付き合っていませんでしたが、付き合いが深まると日本社会の中にイスラーム教徒(ムスリム)が増えてきます。既に10万人近くはいるのですが、付き合いの経験がないから彼等のプライドや文明を傷つけて日本文明への失望や反日本な動きを結びつけかねない恐れがあります。例えば「草刈十字軍」と

いう運動があります。森林労働者が高齢化してきて、森の枝刈りをする人たちが少なくなったのでそれを手助けする若い人たちのボランティアという意味だったのです。キリスト教ではボランティアという意味かもしれませんが、イスラーム教徒から見て、「十字軍」というのは、何の弁護の余地もない野蛮極まりない強盗・略奪行為なのです。そういう意味のある言葉を平気で使うこと自体、問題だと気づかなければなりません。草刈ボランティアとか、草刈義勇軍は少し軍国主義みたいですが、「十字軍」はないだろうと思います。「赤十字」というのもスイスの国旗の裏返しですけど、イスラーム教徒は悪魔のマークとして赤三日月(赤新月)に変えて使います。こういうことを知らなければ余計な摩擦を起こすのです。また、「火葬」もそうです。日本のある市の役所の職員が善意でイスラーム教徒の行き倒れの人を火葬にして送り返してしまいました。イスラームでは「火葬」という行為は「地獄の処罰」なのです。豚肉を食べないという行為も、日本人は気にしないで食べればいいのと思うけれども、宗教上のタブーというものに鈍感な日本人の姿勢の方こそ、共存のためには改める必要があります。これらの摩擦を予防・克服するための準備として「マナー(文化)」と「情報」を意識してほしいものです。

最近の日本文化との衝突については中国とのそれが目立ちます。前にお話したように、アメリカより歴史性・国家の成り立ちに関しては近い処があるにもかかわらずです。なんで衝突が目立つのかというのは、ずばり中国側の歴史の政治的利用に責任があります。歴史とは価値の体系であり、全人類の発展に寄与するノーベル歴史学賞などはあり得ない、各々の文化・文明の価値のひとつなのです。瑣末な例で示せば英語では「美しいバラにはとげがある。」と言いますが、アラビア語では「醜いとげのあるバラにも美しい花が咲く。」と言います。伝える情報は同じでも受け取る内容が全然違うのです。プラスに見るのかマイナスに見るのか、どこにウエイトを置くかで違いが出ます。歴史の過去をこういうつながりで現在があるのだという説明することでまとまるのがひとつの文化であり文明です。つまり歴史認識です。

ですから、歴史認識は文化・国家を超えたら共有できません。そこを共有できるというのは歴史学の立場ではなく、政治のトリックです。歴史学では史実の確認までは文化が違ってても共有できますが、説

明・認識の共有はできません。中国の歴史認識が如何に非常識か、現在の国境でお話しましょう。中華人民共和国の領土・国境に日本人はほとんど何の疑問も持っていません。ところが、国際的には色々問題が出ています。中国政府は現在の中国の領土は古くからの不可分の固有領土であるという言い方で正当化します。実は、日本も20年前、「北方領土は固有の領土だ」と言っていました。だいたい日本の政治家も勉強したのか、「固有の領土」というのは英訳不可能で国際的に通用しないことが判ってきたのか、最近では言わなくなりました。そもそも固有の領土とか、古来不可分の領土など歴史上あるのでしょうか。イタリアの「固有の領土」はかつてのローマ帝国でしょうか？とんでもない話になります。古代からの固有の領土とか古来不可分の領土というのはおかしいのです。中国の言い方をすると清朝の強いときに占領したのが不可分の領土で本物であって、弱いときに取られたのは不当な侵略被害の結果ということになります。これは全くグローバルスタンダードにはならない。聞くのが日本だけだから主張しているにすぎません。ヨーロッパなどで言えば馬鹿にされるだけです。

また歴史的認識について中国が日本を糾弾してやまないのは、30年代の中国への侵略です。これは、ある時期どこからかは、わかりませんが国際法的にも、そしてなによりも日本にとっても間違った政策であったことは大部分の日本人が認めています。こういう歴史認識で日本の世論が納得しているから莫大な資金が、賠償という形は取らなかったが経済支援という形で中国へ回っているのです。しかしこうした事情は共産党独裁の報道管制下の中国では一切報じられていないし、発信されていません。だからもう少し、はっきりとそちらの国家がおかしいと主張すべきであると思います。衝突を一回やって話を政治の場から、学問なり、文明の対話の場へ移すべきだと考えます。

その一つの例として、「日中蜜月の10年」という、言葉を紹介いたします。これは辛亥革命前後の日中関係のことを言うのですが、中華民国の革命家たちと日本が非常に仲が良かったことを示します。その蜜月期間が日本の侵略性の増強によって終わった1924年孫文という辛亥革命の指導者が神戸の女子商業高校で「大アジア主義」という講演を行ないました。この時2千数百人の日本人が聞きに来て、入りきれないほどであったそうです。孫文氏は日本人にだい

ぶ愛想をつかし始めていたのですが、この講演はかつてはアジアの友達であり、白人に対する抵抗する同盟の兄貴分だった日本が少しおかしくなったということの警告のメッセージ、遺言でありました。霸道は武力でねじ伏せて、従わせるヨーロッパの政治手段、それに対して、王道は「徳」をもって、文明の力によって、周りから寄ってこさせるというアジア型の政治、この王道を称讃しています。最近日本は霸道主義になって少しおかしくなっているぞ！王道を目指しなさい。孫文氏の忠告でもありました。その時点にもどり、そのときからの選択肢をひとつひとつを真摯に検証するのが、今後の日中の文明の対話の入り口だと思います。一方的な歴史認識を押し付けてくる活動からは何も生まれません。

さらに学問のレベルに戻す意味では、孫文氏の活動を前の時代に遡って、検証する対話も必要でしょう。孫文氏は、たしかに20年代では中華民国の大スターだったが、それ以前は清朝のお尋ね者のテロリストでした。清朝を倒すために爆弾を仕掛け、軍隊に夜襲を仕掛け、何かあると国外に脱出したテロリストでもあったのです。ところが、日本の明治政府は清朝の手前、孫文氏の歓迎もてなしはしませんでした。日本国民には大変人気がありました。宮崎滔天とか頭山満という志士が軍事費を援助したり、武器を渡したり、当時の日本はテロ支援団体でもあったのです。しかし革命が成功すると、これはプラスです。政治が歴史認識をつくる典型です。

それはともかく日本と中国は長い共存の歴史をもっているのだから、中国文明と日本文明とはなんなのか。近代、ヨーロッパ人に押し付けられた国民国家とか国という枠組みはなんなのか等々のという対話ができる近い仲間だと思います。その次にイスラームですが、日本人はイスラームに対して“得”をしているところがあります。そうですからハンチントン氏が予言するように儒教とイスラームが合体してキリスト云々の対立形ではなく、日本も入れてもらって、アメリカの武力的ないきすぎを是正するような文明世論の形成に協働の機会があるのではないのでしょうか。隣同志のどうせ引越などできない伝統性のある日中ですから、そういう糸口になるのではないかと、そしてイスラームも対象になるのではと考えております。

< おわり >

2001年9月11日のテロの翌日、私の友人の教え子

がカイロの大学院に留学しているのですが、カイロの学生達の握手攻めに逢ったそうです。「これで広島と長崎の仇は討ったな！」と、やったのは日本人だと思っていたのです。イスラームでは自爆や自殺は禁止されています。神が創った被造物の人間が自分で死ぬことは禁止されているのです。ところが自爆すると威力があると教えたのは日本赤軍のテルアビブ事件で、飛行機で突っ込むのを考えたのは神風特攻隊で、これを合体させたのだから、日本人がやったのだらうと思ったわけです。これを「広島や長崎の仇を討った。」と結びつけて善意の祝福なのでしょうが、日本に対する認識不足は、日本の方からの対話で修正する義務があるとおもいます。こういう捉え方もあるのに驚かされます。仇を討つ代わりに、日本は平和主義という点から世界最大のODA支援国になりました。9・11のテロの後でアメリカがODAの予算を1.5倍に増やすことを発表しました。経済的悲惨がテロの温床になるからだそうです。「今頃判ったか！」と言いたい気分です。日本文明が世界に発信できる情報はまだあると思います。

最後にイスラームのことでこんなに多くの皆様に関心を持ってくださったことがとてもうれしく思います。無関心が悪いことを生んでいます。何よりも関心をもっていただき、また、こういう場をもって、意見の交換をしたいと思います。長い間ご清聴ありがとうございました。

《以上は2002年6月8日（土）甲南大学132号講義室にて開催された講演に基づく》

《講師紹介》

1946年大分県生まれ、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。甲南大学文学部教授
中央アジア史。シルクードの歴史。遊牧民族史。イスラーム教史。内陸アジア史学会。東洋研究会。
著書に『地域からの世界史6・内陸アジア』（共著、朝日新聞社）

平成13年度研究チーム活動中間報告

「環境教材の国際ネットワーク化」

No. 77 研究幹事 谷口文章 (文学部)

今年度は、昨年度の成果をふまえて、環境教材の国際ネットワーク化の研究が促進された。前半は各研究員のテーマを消化しつつ、大学における環境教育の体系化をめざした取り組みや環境問題に関しての先入観的誤謬の問題が論じられるとともに、研究員のフィールドワークにおける実習参加が行なわれた。そのような理論と地域的な活動をベースとしながら教材を作成するとともに、環境教材の国際ネットワーク化が実行されつつある。そのために、今秋、中国・北京大学教授2名、天津教育科学院院長、中国教育科学研究所学術研究員を招聘して、第2回日中環境教育情報交流シンポジウム(2002年11月30日 於: 甲南大学)が開催された。そのときの研究会においては、具体的な国際ネットワークの実施計画と共通フォーマット及び共有教材について検討された。

中国においては北京大学の環境科学センター、天津市教育科学院の教育部、ハルビン工業大学の環境科学センター、河北大学の教育学部、天津日中大学院の環境管理部、タイにおいてはラジャバト王立大学プラナコーンの環境教育センター、チュラロンコン大学の環境科学センター、さらにカナダにおいてはヴィクトリア大学の環境学部とのインターネットによる国際ネットワーク化が進められつつある。

こうして、環境教材の共有化の第一歩として、英語バージョンのインターネットが各国の研究・教育機関において作成されつつある。各国の大学や各国の自然環境の特色を活かしたコンテンツが現在検討されている。また具体的に2003年7月にはカナダのヴィクトリア大学においてフィールドワークを中心にした環境教材の共同開発及び8月に中国のハルビン工業大学において第3回日中環境教育情報交流シンポジウムの開催が決定している。

今年度の成果としては、理論面と実践面に関する環境教材の開発、また大学における環境教育の体系化、インターネットによる環境教材の共有化の努力がなされ、近い未来に実現できる「環境教材の国際ネットワーク化」の具体的な内容へとつながった。

「日中言語表現習慣に見る文化相違の研究」

No. 78 研究幹事 胡金定 (国際言語文化センター)

「日中言語表現習慣に見る文化相違の研究」の研究チームは、4月17日(水)に研究会を開催した。研究会に先立ち、今回の研究会ではこれまでの研究項目である①自己紹介のしかた、②初対面での話題、に続いて、③呼称のしかた、④名刺交換、⑤電話のかけかた、⑥あいづち、について報告と討議を行うことが話し合われた。

③の呼称のしかたについては、日中両国において、「苗字・名前・肩書きが人間関係の親疎・社会的関係・年齢によっていかに用いられ、また各人は現実にもどのように呼ばれているか」が話し合われた。特に教師と学生の関係では、中国では親しさが増すと学生が教師を名前で呼ぶことがあり、その点では日本と異なる呼称の関係があることが注目された。また、家名について、中国の姓名の由来がどのように系統的に分類され、また中国では家名がいかに大切なものであり、女性は結婚しても苗字は変化せず、その背景には家を中心として子孫を継承していくこと、その継承に当たっては女性は子種を宿すという役割であるという所以からであることが報告された。

日本の会社では社内では「部長!」「課長!」などのように名前を用いず、肩書きによって呼び、家の中では兄弟関係によって、目上の関係では「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」、目下の兄弟は名前によって呼ばれることが多い。中国でも、紹介の時などには名前に肩書きをつけて呼ぶが、これは相手を立てるという精神から生じている習慣である。中国は革命後、名前に「同志」をつけて呼ぶことが一般的であったが、最近ではその傾向は薄れている。また、中国で「副社長、副部長」のように「副」を伴う肩書きの人を紹介する際には、相手を立てる意識から「副」を取って単に「社長、部長」のように紹介することが多い。これは書面ではもちろん正

確に「副～」のように記述されるが、会話においてはあくまでも「相手を立てる」精神に基づいて、「副」をとって紹介するという習慣があることが紹介された。

④の自己紹介の際の名刺交換については、日中両国共に名刺交換は盛んであり、中国では学生も名刺を持っている。両国で異なるのは、中国では名刺にあらゆる肩書きを記載しようとする点であり、これは相手に尊敬の念を与えようとするためである。名刺に記載事項が多ければ多い程、尊敬の念を与えると一般に信じられているからである。当人にとって、都合のよい肩書きを紹介するのは両国共通であり、自己紹介において、所属する組織や団体が優先され、個人のことが二の次になるという「縦社会」的であることも両国に共通して見られる現象である。

⑤⑥の「電話のかけかた」と「あいづち」にも日中両国での習慣の相違が見られる。特に、日本では、問いかけに対し目礼や表情で返答する場合も多いが、中国では必ず言葉を返すことによって返答しなければ、相手に失礼な印象を与える。

以上のような研究報告を通して、日中言語表現習慣の中での文化相違の特徴が示され整理された。さらに、今後は新たな項目について研究報告を重ね、日中の文化相違に見られる特徴から異文化と多文化のコミュニケーションのありかたに言及していく所存である。

「宗教と大英帝国」

No. 79 研究幹事 井野瀬久美恵（文学部）

本年度も昨年度にひきつづき、本プロジェクトでは、ミッション・ネットワークと関わるさまざまな専門家から報告を聴き、ネットワーク構築過程における具体的な問題やあり様などについての議論を深めた。以下、各報告を簡単に紹介しておきたい。

◆第1回目 2002年4月20日

報告者：大江満氏（同志社大学人文科学研究所嘱託研究員・立教学院史資料センター研究員）

報告タイトル：「遣日宣教師の驚嘆と失意」

大江氏は、日本におけるキリスト教宣教師の専門家であり、歴史学・人類学・文学などを専門とする本研究会メンバーの“弱点”であるキリスト教の教義や歴史そのものをたえず補完していただける存在である。報告では、日本における欧米キリスト教宣教師の活動に関する具体例をあげながら、個人として、そして集団としてのミッションたちの苦悩、日本での布教に際して欧米の諸ミッションの方針に見られた確執、他の東洋社会におけるキリスト教の役割との比較などが語られた。日本におけるキリスト教——正しくは日本におけるキリスト教の「脱宗教化」の問題——再考は、同じネットワークからアフリカやオセアニアに向かったミッションたちの話とも連動する部分が多く、興味深いものであった。

◆第2回目 2002年6月22日

報告者：小檜山ルイ氏（東京女子大学）

報告タイトル：「アメリカ帝国主義と女性宣教師：アメリカの女性による超教派海外伝道運動の例から」

小檜山氏の報告は、アメリカ帝国主義再考の文脈を、アメリカ海外伝道史と重ねて捉えようとする意欲的なものであった。主な対象時期は、伝道活動の絶頂期でもあった1890年代から第一次世界大戦まで。1900年、エキュメニカル会議（NY）を契機とする超教派海外伝道の使命感について、「東洋の7つの女子大学」キャンペーンを具体例としてあげながら分析された。氏が勤務する東京女子大学はこのキャンペーンで設立されたものだが、貴重な図版や写真を駆使した事例研究は、「文化交渉」の問題にも踏み込んでおり、メンバーとの間に熱い議論が交わされた。

◆第3回目 2002年9月28日

報告者：小泉真理氏（秀明大学）

報告タイトル：「白い人の宗教に魔力をみたキング人——民族の構造化と植民地経験」

独領から英領へと移行した東アフリカ、タンザニア南西部にあるキングは、小泉氏が2年間余りフィールド調査した場所である。その宣教史を整理したうえで、報告は、ドイツ植民地期（1890-1914）を中心として、宣教運動の動機やその手法、宣教活動による現地の部族構造の変化などを、ドイツ帝国主義の文脈で分析を試みるものとなった。とりわけ、マジマジの反乱（1905-07）期の対応、この反乱後急増したキリスト教改宗にかんする考察、英領化によって彼らドイツ人ミッションの活動を継承したロンドン伝道教会(LMS)との認識のギャップなどへの考察は興味深かった。

◆第4回目 2002年10月26日

報告者：橋本和也氏（京都文教大学）

報告タイトル：「文明化かマナか——島嶼人「宣教師」が明らかにしたもの——」

19世紀後半のフィジーを例に、白人宣教師ではなく、島嶼人宣教師（native）による伝道の意味を考えることによって、文明化とキリスト教化の関係を再考しようとした報告である。異教徒は「文明」によって改宗するのか。それとも、異教徒が進行する「マナ（＝霊的威力）」によって改宗するのか。白人（＝文明）がいなくても宣教の成果はあがるのか。つまるところ、西洋文明なしにキリスト教の布教は成立するのか。ウェズレー派メソヂスト教会の『月報』を資料とする具体的な事例とその分析に議論が沸騰した。

◆第5回目 2002年11月2日

特別講演 マーガレット・シュトロベル氏（イリノイ大学シカゴ校教授、ジェンダー・女性学・女性史研究）
「女性儀礼にたいする宣教師の態度（Missionary Attitude toward Female Puberty）」（通訳：井野瀬久美恵）

国立民族学博物館にて開催された国際シンポジウム「ジェンダーの視点からのアフリカ史再考（Rethinking African History from Gender Perspective）」（2002年10月30日～11月1日）のために来日したシュトロベル氏による特別講演。彼女は、自らフィールド調査したモンバサ、タンザニア南部のマサシ、ケニアのキクユという3つの地域における女性性器切除（FGM）問題をとりあげ、キリスト教宣教師らの対応の差がなぜ生じたのか、その差は何を意味しているのかなどについて、OHPやビデオを駆使して報告した。われわれはFGM問題をどう論じればいいのかについても、聴講した学生たちに強い印象と影響を与えたと思われる。

さらに、11月30日には、創立110周年を迎えた松蔭学院から、学園史編纂に携わった教諭をお招きして、「英国教会福音宣教協会（SPG）」の日本におけるミッション活動の意味を考える報告会を開いた。詳細は機会を改めて紹介させていただきたい。（文責 井野瀬久美恵・文）

「環境と文学」

No. 80 研究幹事 中島俊郎（文学部）

環境と文学の関係を探究している当チームは、身体、経済というふたつの視座を中心にリサーチを進めている。後者について、秋元孝文（文学部）は、アメリカ建国の祖であるベンジャミン・フランクリンをとりあげる。アメリカ最初の紙幣（100ドル札）をつくることになる大統領であるが、これまで深くその意義を問われてこなかった、この事実は印刷メディアの根と深く絡まっており、経済的営為と文学創造の関連を自伝、日記などの第一資料から、貨幣と文学という実体のない価値を浮き上がらせようとする。アナ・フォード（言語文化センター）は、バーミンガム大学に提出した学位論文の一部を修正しつつ、現代イギリス文学（ヴァル・プラムウッド、エリザベス・グロツなど）とりわけ女性作家が直面している「とらわれた身体」という内なる環境と、「文化」という外なる環境との相克を丹念に論究していく。またサウンドスケープ論を、ヴィクトリア朝の詩テクストを対象に調査している中島俊郎（文学部）は、従来の聴覚を中心にしたサウンドスケープ論の枠組みを超えて、聴覚が他の諸感覚と結びつき、より豊かな「音」世界以上に、多彩な五感の世界を見ようとする。

なお当チームに与えられた課題をより深く理解するため、景観工学の専門者を講師として招き、知見を深めたい、と計画している。（文責 中島俊郎）

平成14年度研究チーム概要

◎研究課題 (NO.81)

「グローバル化下の各国社会保障改革比較」

・研究の目的

今日先進諸国が共通に直面している社会保障制度の改革圧力に対し、各国がいかなる対応を試み、成功（失敗）しているのか、そして相違を分けたファクターは何であるのかを分担して比較研究し明らかにしたい。

・研究の内容および効果

1990年代以降、先進諸国の社会保障制度はグローバル化の進展による国内経済政策への制約、高齢化や構造的失業の存在による福祉給付受給者の増加と社会保障財政の悪化といった様々な挑戦を受け、改革を強いられている。本研究では、①まず各国の直面する問題を法・政治・経済の諸視点から構造的に明らかにするとともに、②各国で進行しつつある社会保障改革について、いかなる制度的変更が試みられ、実現しているのか、それらの経済的効果はどの程度なのか、そして改革を支える政治的支持の強弱などを明らかにし、③今後の見通しを立てるものとする。地域分野を分担しつつ比較・総合を行なうことで、現代国家の不可欠の機能である福祉機能が蒙りつつある変容のダイナミクスを解明し、将来の展望を示すことは、学問的にもまた実践的にも多大な意味を持つものと思われる。

・総合研究として研究することの必要性

社会保障研究は本来、法・政治・経済など多分野に及ぶインターディシプリナリーな領域であるにも拘らず、現実には各分野の研究者が独自に研究を進め、全体像を掴む作業がおろそかになっている。本研究は三名が法・政治・経済の異なるアプローチから共同して社会保障改革の構造を明らかにしようというものであり、学際的研究の名に値するものとなろう。

・研究チームメンバーと所属と研究課題

水島治郎 (研究幹事) 法学部	「オランダを含む大陸ヨーロッパの社会保障と政治」
長瀬満男 法学部	「オセアニア諸国の社会保障と法」
小林 均 経済学部	「アメリカ・日本の社会保障と経済」

◎研究課題 (NO. 82)

「マックス・ヴェーバーにおける『民族』問題とその周辺」

・研究の目的

近年の哲学、社会学、歴史学、経済学、法学、政治学などの国際的な学界において再評価（いわゆる「ヴェーバー・ルネッサンス」）され、著しい進展が見られるマックス・ヴェーバーに学問と思想の研究の動向に注目しつつ、とりわけ21世紀に入って一層アクチュアルな問題になっている「民族問題」についてのヴェーバーの理論を再検討する。それを通して、社会科学を営む際の基本概念である「国家」、「民族」、「人権集団」についての定義を獲得することによって、社会科学的研究と政治的・社会的実践のための「指針」を見つけだすことを課題とする。

・研究の内容および効果

本来「近代国家」が政治権力の集中と制度的民主化・国民的統合を通じて基本的に解決すると考えられてきた「民族問題」がグローバル化の急進展のなかで、今や世界の至る所でマグマのように噴出している。その原因としては、国際連合、EU、WTOなどの国際組織による国家主権の制限、生活スタイルと文化のアメリカナイゼーション、地域やマイノリティーの権利主張のたかまり、新たな貧富の格差の発生、そしてなによりも「民族主義」や「原理主義」の問題性についての一般的無理解、などを挙げることができる。

ヴェーバーの著作も、議会制と政治権力を備えた営造物（Anstalt）としての「民主的な国民国家」をいかに確立するかという観点で読まれてきた。そのために、このような「民族問題」についてのヴェーバーの思索の跡は関心の的とはなっていないといえる。その欠を補うために、ヴェーバーにおける“Nation”の意味内容を、ヴェーバーの学問と思想の変化とその時々時代の背景とのかかわりで明らかにする。さらに国家や民族、国家主義・民族主義をめぐる他の思想家（ミル、福沢、丸山など）の思想、これらめぐる最近の諸研究と対比させることによって、ヴェーバーの諸概念の特徴を検討する。また、それと並行して、歴史的現実としてのイスラム、ロシア、アジアにおける国家と民族、国家主義と民族主義を分析するための索出的概念としての有効性についても検証する。このような作業によって、従来ややもすれば情緒的な概念、非合理的なものを含む存在として社会科学の諸分野で等閑に付せられてきた「民族」という問題に対し、一抹の光をあてることができるであろう。

・総合研究として研究することの必要性

言語、法、宗教、思想、政治、音楽、芸術、経済、生活習慣などあらゆる文化・社会現象は、歴史的には、「民族」のかかわりを持って成立し、展開してきたのであり、それらを対象とする社会科学・人文科学は、多かれ少なかれ特殊性と普遍性の把握に力を注いできた。その意味で、たとえ「幻想」であったとしても、それらの器としての「民族性」の問題を検討するためには、様々な角度から、すなわち学際的な共同研究によってこそ、その問題性が解明できるのではないかと考える。

・研究チームメンバーと所属と研究課題

黒田忠史（研究幹事）	法学部	「ヴェーバーにおける国家・民族・人権の概念、およびユダヤ民族・ユダヤ民族主義にたいする立場」
小島修一	経済学部	「ヴェーバーとロシア帝国の民族問題」
安西敏三	法学部	「ミル・福沢・ヴェーバーにおける民族」
堀直	文学部	「イスラムにおける民族」
高木康行	朝日新聞社	「ヴェーバーの観点からみたアジア主義」
土居充夫	大阪経済大学教養部	「ヴェーバーにおける市民」
井口吉男	大阪経済大学教養部	「丸山真男における国民国家」
内藤葉子	大阪市立大学大学院	「《歴史の前でのわれわれの責任》 ーヴェーバーとナショナリズムー」

◎研究課題（No.83）

「イギリスと日本」

・研究の目的

イギリスと日本の関係をさまざまな研究分野から照射し、全体像を捉える。

・研究の内容および効果

19世紀に強力な帝国を築き上げたイギリスは、科学、文芸、社会制度において世界の最先端をかけていた。後発国の日本は、国体の観念をはじめ進んで文化・文明をがむしゃらに吸収しつつ、国家を形成して行く。この2国間の関係と特質を、宗教、政治、文化、メディア、犯罪等の方面から浮き上がらせ、異なる分野の研究員との討論により、巨視的な視点に立ち至らせることが期待できる。

・総合研究として研究することの必要性

テーマが巨大であるので、多方面から、アプローチしない限り「イギリスと日本」についての全体像をつかみ難い。

・研究チームメンバーと所属と研究課題

西條隆雄（研究幹事）	文学部	「ヴィクトリア朝小説と犯罪」
村岡健次	文学部	「近代日本とキリスト教」
安西敏三	法学部	「福沢諭吉の見たイギリス」
中島俊郎	文学部	「Edwin Arnold の日本」
井野瀬久美恵	文学部	「表象の帝国—日本と英国」
高橋哲雄	文学部	「比較史的に見た Scottish Identity の諸側面」
松村昌家	大手前大学	「日本使節団とイギリス」